

<シリーズ2 : Q2 & Q3>

Q2: 障害が重度な子どもに、なぜ国語や算数なのか

障害が重度で重複している場合には、「教科指導は難しいと考え、教科指導を自立活動に替えて指導すること」が基本と考えていました。

「障害が重度な子どもに、なぜ国語や算数なのか」と疑問に思います。どう考えればいいのでしょうか。

A2: 基本は国語や算数の教科

「教科指導を自立活動に替えて指導することが基本」と考えられていますが、本当にそうでしょうか。

学校教育の基本は何でしょうか。「何を基本とするのか」、そこから検討を始めることが大切です。

現在の学校教育の基本のひとつは、「国語や算数など教科の指導」を行うことです。自立活動の指導が基本という考えは、「当たり前」を勘違いしていることになります。

まず、その勘違いを修正しましょう。そして、本当の基本、国語や算数などの教科の指導を実現するために必要なことを工夫していきましょう。

知的発達がゆっくりである子どもに対する工夫として、小学校の教科とは異なる「知的障害特別支援学校の教科」があります。その教科には、小学部が3つの段階で示されていて、その段階のまとまりごとに、目標や内容があります。国語や算数のどの段階であれば、その子どもが学ぶことにチャレンジできるのか否かを検討します。

例えば、小学部の国語の1段階であれば「教師の読み聞かせに表情や身ぶりで応じる」「身近な人から話しかけられた状況を受け止め、関心をもって話し手を見る」など、算数の1段階であれば「物に気づく、あるないがわかる」「ものに手を伸ばす、かむ」など発達初期の行動も教科の目標や内容に含まれています。このような行動であれば、多くの子どもが国語や算数で学ぶことが可能になります。さらにSスケールはより発達初期の行動を含め、実態把握に活用するためのものです。

まずは、学校教育の基本である「国語や算数など教科の指導」にチャレンジしましょう。その際に、Sスケールは強力なツールですので、活用の工夫をしましょう。

Q3: 「自立活動に替える」、容易にそうしない、とは

そもそも教科の指導を自立活動に替えるというのはどういうことですか。

また、「容易に自立活動を主とした指導を行わないように」ということを聞くことが多くなりましたが、どのような意味でしょうか。

A3: 重複障害者等に関する教育課程の取扱いと教育の基本の確認

平成 29 (2017) 年改訂の学習指導要領における「重複障害者等に関する教育課程の取扱い」「重複障害者のうち、障害の状態により特に必要がある場合」の規定があります。同じ意味の規定は、養護・訓練が創設された昭和 46 (1971) 年の養護学校小学部・中学部学習指導要領にもあり、歴史ある規定です (Q1 に対する A1 の表 1 参照)。

もともとは、「重複障害者のうち、障害の状態により特に必要がある (学習が著しく困難な) 場合には」、小学校における国語や算数の教科などの目標や内容では指導内容として不適切であり、それらの国語や算数の指導に替えて、自立活動 (養護・訓練) の指導を行うことができる、ことを意味するものでした。

最初はこの意味だったので、小学校の 1 年生の前段階の学習状況にある場合には、この規定を活用して、国語や算数の指導を行わず、それらに替えて「養護・訓練」の指導を行うことが多かったようです。同じ頃に知的教科が位置づけられましたが、「養護・訓練の指導に替える」ための手続きが検討されることは少ない状況でした。

つまり、「自立活動に替える」とは、国語や算数 (小学校や知的教科) の指導内容が当該児童生徒に不適切と判断した際に、それらの国語や算数の指導に替えて、自立活動 (養護・訓練) の指導を行うことを意味します。

その考えが現在にも残っていて、肢体不自由に加えて、知的障害のある子ども、特に知的障害が重い場合には、知的教科の国語や算数の指導の可能性を検討せずに、自立活動に替えて指導する傾向が強かったという経緯があります。

そのような状況は、インクルーシブ教育システムの構築の視点から許されるものではないために、「容易に自立活動を主とした指導を行わないように」ということが強調されることになりました。また、学校教育の基本を踏まえて、ちゃんとした教育課程の検討をしていこうとするカリキュラム・マネジメントの視点でもあります。

「容易に行わない」とするポイントを示すと、①学校教育の基本は国語や算数などの教科指導であり、その可能性を検討し、厳しい状況の場合であっても一部は国語や算数の指導を維持することが求められている、②学びの積み重ねやすすべての児童生徒に体験して身につけてほしい内容は教科指導がなじみやすく、自立活動の指導については目標や指導内容設定の手続きを踏まえて取り組むことが求められている、と考えます。

カリキュラム・マネジメントからすれば、何が基本かを改めて確認して、児童生徒の学びの状況を踏まえて、その基本である教科指導を修正していくことが求められます。

再度、何が「基本」なのかについて確認しましょう。

(徳永 豊、2021 年 5 月)